

龍谷大学佛教文化研究所新報

第40号

◇研究ノートⅠ

龍谷大学図書館蔵

中世国語資料の研究について

余田 弘実

一、はじめに

龍谷大学佛教文化研究所、二〇一四、二〇一六年度の指定研究として、藤田保幸主任のもと「龍谷大学図書館蔵中世国語資料の研究」のプロジェクトを進めてきた。本プロジェクトでは、同大宮図書館に多数所蔵されている室町期書写の貴重書のうち、『異名盡并名字盡』『職原抄』『名目鈔』について調査・研究を行うと同時に、研究談話会を開催して、これらの資料の調査を報告し、「中世国語資料」の研究の今後の展望・課題を考えてきた。現在は、『異名盡并名字盡』『職原抄』『名目鈔』を善本叢書の一として、来年度に出版することを目指して解題を作成中である。それとともにプロジェクトの成果

の発表を企画している。

本稿では、現在までの過程とプロジェクトを進める上で生じた、中世国語資料研究の課題について述べてい。

二、『異名盡并名字盡』『職原抄』『名目鈔』

龍谷大学善本叢書では、龍谷大学大宮図書館蔵の日本文学関連の書が、既に多く刊行されている。しかし、日本語学関連の書の刊行は決して多いとは言えない。本プロジェクトでは、『龍谷大学和漢書分類目録』（昭和十五年七月末現在）の目録から『異名盡并名字盡』『職原抄』『名目鈔』を選び、取り上げて公刊することにした。この三書を取り上げることにしたのは、語を列挙した語彙集である

ことが共通している点であり、これらの語彙を調査研究することで、中世における言語生活の営みの一端がわかるのではないかと考えたからである。

なお、『異名盡并名字盡』『名目鈔』は、龍谷大学貴重書データベースで既に公開されている。

以下、この三書の概要について述べる。調査は『異名盡并名字盡』が三宅えり、『職原抄』が宇都宮啓吾、『名目鈔』は三宅と余田が担当した。

『異名盡并名字盡』（021-409-1）

外題 「異名盡」

内題 「異名盡并名字盡」

書写年代 延徳三（一四九二）年

装丁 四目袋綴

表紙 黄土色表紙（後に綴り直し

たもの）

大きさ 表紙・二四・六cm×一七・六

cm

丁数 三十丁

『異名盡并名字盡』の写本は、現時点の調査では孤本である。本文三〇丁のうち、巻頭から二二丁まで「異名盡」の語彙を列挙し、その後四丁分の「名字盡」の部分の挿入、さらに四丁分の「異名盡」の記述が続く、単語のみを列挙する辞書である。巻末に延徳三（一四九二）年とある。

「異名盡」の部分は「日・月・星……」等、類書によくみられる部立てにより分

類され、それぞれの項目に該当する漢語が所収されている。たとえば、「日」の項には「萍實・曜鳥・烏輪……」等の漢語が並ぶ。このような様式の先行例として、菅原為長（一一五八―一二四六年）による『文鳳抄』がある。『文鳳抄』の成立は嘉禎元（一二三五）年頃かとされる。『文鳳抄』に収集された語彙は実際に詩文に用いることを念頭におかれたものである。実際にその語を用いた詩文の例が併記されることもある。詩作の手引きとして編まれた『文鳳抄』の語彙と『異名盡并名字盡』の「異名盡」の語彙は重なるものがあり、『異名盡并名字盡』の編者が詩語を「異名」と捉えていたことが窺える。

また、室町時代の辞書『下学集』の慶長十五（一六一〇）年写の春良本注、元和三（一六一七）年版注には異名と記載された語があり（萩原義雄一九九六、『異名盡并名字盡』と重なるものもある。「異名」という概念が形成される過程を辿る時、龍谷大学本『異名盡并名字盡』は重要な手がかりを提供するものと思われる。ところで、無刊記本ながら、加賀文庫等に『袖珍異名集』なる版本が残っている。おそらく江戸時代のものと思われる。その部立てと語彙は『文鳳抄』以上に『異名盡并名字盡』と重なる。ただし、『袖珍異名集』には語を用いた例文が所収されており、語のみを列挙する『異名盡并名字盡』とは、その点が異なる。また、

上野国勢多郡原之郷村の小農船津家には嘉永三年に『異名抄』を購入した記録があり(高橋敏一九九〇)、江戸時代では『異名』に関する辞書を活用していた様子が窺える。『異名盡并名字盡』は江戸時代における「異名」辞書の流布に先行した辞書といえる。

『異名盡并名字盡』の「名字盡」の部分は名字のみを列挙している。所取の名字は元禄三(一六九〇)年刊の『名字尽』と重なるものも多い。

『異名盡并名字盡』は、後に江戸時代に刊行され、手元に置き、活用された辞書の原型といえるであろう。そのような点で、本書は龍谷大学図書館の貴重な蔵本である。

『異名盡并名字盡』が漢詩文についての書であったのに対し、『職原抄』『名目鈔』は、有職故実に関する書である。

『職原抄』(021-391-1)

外題 「職原抄」

内題 「職原抄」

書写時期 天正十九年(一五九二)から十七世紀初期頃

装丁 四目袋綴

表紙 藍色表紙

大きさ 表紙・二七・五cm×二一・九cm

丁数 八八丁

鎌倉時代後期から南北朝期の公卿、北畠親房が、興国/暦応三年(一二三四〇)

に常陸国小田城で、戦陣の間に東国武士の任官要求に対処するために執筆されたとされる有職故実書で、朝廷の官制の成立や沿革、補任や昇進の流れとそれに伴う儀式、各職に任せられる家格、個々の省・寮・司・職・所の職掌や唐名、官位相当等を漢文体で記した書である。従来、歴史史料として研究されることはあっても、言語史料として注目されることはあまりなかった。

龍谷大学本が注目される点の一つは、清原枝賢が関白秀吉への進説のために用意した備進本であることが、奥書から窺われることである。この点は、枝賢の父である宣賢が有職故実学における清原家の学を確立させ、天皇の信任の厚い様が窺われる。つまり、龍谷大学本は、清原家としての学問をハレの場で披露することを目的とした書であることが窺われ、いわば、桃山時代における清原家の有職故実に関わる学問の粹を示す一書として注目できる。

なお、奥書等から、大東急記念文庫が豊臣秀吉備進本に該当し、龍谷大学本はその写しと捉えるべきではないかと考えられるが、確認が必要である。

『職原抄』の写本は多数残されているが、龍谷大学本の本文は、最近、刊行された國學院大學蔵本の写本と記載内容自体に大きな差異はない。

言語資料として龍谷大学本を取り扱う場合、注目すべきは、調点に基づく「故

実読み」の存在である。本書は、基本的には清原家の読みを継承しているものの、清原宣賢の故実読みと更に三条西家の故実読みとを併記している箇所が見いだされる。そのような例は、清原枝賢が清原家の読みと三条西家の読みを比較した上で他家の読みとの取捨選択の意識を持ち合わせていたことを窺わせる。「故実読み」と言えば、一般に固定された読み方を想像しがちであるが、この点において、「故実読み」自身にも、旧来の読みと新しい読みの揺れが存在することが指摘できる。すなわち、「伝統的な故実読み」の一方で言語変化に伴う「新たな読み」が作り出されてゆくと考えられる。龍谷大学本は、「故実読み」のそのような側面を考える上で重要なものと言える。

『名目鈔』(021-384-1)

外題 「名目抄」

内題 「名目抄」

書写年代 永正一五年(一五一八)

装丁 四目袋綴

表紙 黄土色表紙

大きさ 表紙・二八・〇cm×二一・八cm

丁数 二二丁

洞院実熙による成立年代未詳の有職故実書で、日本語史の研究としては、声点を付したものを資料として、アクセント史や清濁の研究の書として利用されてき

た。また、佐藤喜代治『国語学研究事典』(明治書院 一九七七)は「行幸」「調度」を例に挙げて「古語の研究の参考資料になる」が、「色葉字類抄」と比較して「時代の差を考慮する必要がある。本書は異本によって清濁の区別などに異同があり、利用には注意が必要である」と述べている。龍谷大学本は、上野(一九九二)が自筆本の写しを分類した「菅原本系」に属し、漢字に傍訓を付しているが、声点・濁点がなく合点がある。「菅原本系」の『名目鈔』の写本は残されているものが少ないにもかかわらず、近世以降の版本の『名目鈔』は菅家本を参照しているものが多い。そのような点で、龍谷大学本は注目されるのである。

『名目鈔』成立時は、武家政権下にあり、公家の存在意義は揺らいでいたと思われる。龍谷大学本の構成は「恒例諸公事付神事佛事、同臨時篇、私儀篇、諸公事言説篇付私儀、禁中所々篇、人体篇、院中篇、雑物篇、衣服篇、文書篇(篇名のみ。識語が続く)」となっているが、「恒例諸公事付神事佛事」を冒頭に置いたのは、年中を通して公家の存在価値を示そうと考えたためであろう。龍谷大学本を「恒例諸公事付神事佛事」について上野(一九九二)が分類した通秀本系の陽明文庫甲本と比較してみると、かなりの違いが見られる。一方、自筆本の影写である書陵部東山御文庫本と「恒例諸公事付神事佛事」も含む全体を通して比較する

と、「文書篇」までは本文がほぼ同じであり、龍谷大学本が自筆本の写しに、より近い形態を持っていたことが考えられる。

以上、本プロジェクトで取り上げた『異名盡并名字盡』『職原抄』『名目鈔』の調査の概要を述べた。より詳しい調査結果は、善本叢書の解題や各自の研究論文で論ずることにしたい。

三、おわりに

『異名盡并名字盡』『職原抄』『名目鈔』を資料とした「龍谷大学図書館蔵中世国語資料の研究」の、現在までの研究と今後の見通しについて述べたい。

公家政権が揺れている時代の有職故実書である『職原抄』に取められた語彙は、「故実読み」という「伝統的な故実読み」であると考えられる。⁽⁵⁾ところが、調査をしてみると言語変化に伴う「新たな読み」が作り出されていた。そのような動きが『名目鈔』というような公家の存在意識を誇示するような有職故実書を生じさせたとも考えられる。⁽⁶⁾『名目鈔』は、江戸時代に版本として多く刊行され、内容も増補されていく。また他の有職故実書と合冊されて普及していくという大きな流れを形成する。先に述べたことの繰り返しになるが、龍谷大学本『名目鈔』は「菅家本系」に属し、残されている写本は少ない。ところが、江戸時代の版本では菅

家本によって増補されたものが多い。近世以降の有職故実書を考える上でも重要な書と言えよう。

『異名盡并名字盡』は、その書写の当時「異名」が付された名の書は見られないが、『下学集』に「異名」と記された語があり、辞書史の一端を考える上で重要である。

本プロジェクトは中世の日本語資料を調査研究の対象としているが、これらの資料の影響は後世にも至ることが指摘できる。そして、中世の故実読みも、決して言語変化の流れと無関係であるわけではないのである。

『異名盡并名字盡』『職原抄』『名目鈔』の調査研究の着手に当たっては、語彙集である点が共通であったものの、当然ながら調査に着手した時点では、各文献は個別の調査であった。しかし、各資料には共通の性格が見られた。前時代までの知見を引き継ぎながらも次の時代への変化のきざしを感じさせるのである。そのような共通点の認識は、龍谷大学佛教文化研究所、二〇一六年度第八回研究談話会での鈴木巧真「日本語史の中世 中世辞書が参照し採録したものに就いて」、山本真吾「日本語史の中世―「古」なるものへの意識―」の講演でも再確認できたことを付け加えておく。さらに、今後は和歌と有職故実、国語学と有職故実に関するテーマでの研究談話会を予定している。

註

(1) 宇都宮啓告「龍谷大学図書館蔵『職原抄』の資料的性格」(龍谷大学佛教文化研究所 二〇一五年度第一〇回研究談話会 二〇一六年一月二八日 於龍谷大学大宮学舎)

(2) 大学院六〇周年記念國學院大學影印叢書編集委員会編「神皇正統記・職原抄」(朝倉書店 二〇一四年)

(3) 余田弘実・三宅えり(二〇一六)「龍谷大学大宮図書館蔵中世国語資料の研究―『名目鈔』『恒例諸公事付神事佛事』について」(龍谷大学佛教文化研究所紀要 五四) 三宅担当分。

(4) 余田弘実「龍谷大学図書館蔵『名目鈔』について―恒例諸公事付神事佛事―」(龍谷大学佛教文化研究所紀要 五四) 三宅担当分。

目鈔』について―恒例諸公事付神事佛事―」(第三三〇回日本近代語研究会 二〇一六年二月二七日 於二松学舎 レジューメ)

(5) (1)に同じ。

(6) (3)に同じ。

参考文献

上野和昭(一九九二)「名目鈔諸本の系統について」(『国語学研究と資料 一六』早稲田大学大学院文学研究科紀要 第三分冊)
高橋敏(一九九〇)『近世村落生活文化史序説上野国原之郷村の研究』(未来社)
萩原義雄(一九九六)「『異名』について―『下学集』の異名語彙をもとに―」(駒澤大学北海道教養部研究紀要31)

◇ 研究概要報告 ◇

平成二十八(二〇一六)年度本研究の研究計画は、指定研究二件(継続二)、共同研究五件(継続二、新規三)、常設研究三件(継続三)、特別指定研究三件(継続三)、そして個人研究一件(新規一)が設置され、合計十四件の研究プロジェクトが構成された。次に示すような具体的な計画のもと、総研究員数二〇二名の協力によって推進される。

本研究は研究事業として、仏教文化講演会を十一月二十五日に第八十五回(一切経伝播の鍵を握る経録―近世写本『貞元録』から考える―)を開催している。研究成果として、『佛教文化研究所紀要』第五十五集には常設研究他の報告論文六編ならびに仏教文化講演会の講演記録を収めた。